

はじめに

カルト・オカルト・ニセ科学について全体的に扱いたい

本書の企画のきっかけは、2022年7月8日に起きた安倍晋三元首相銃撃事件でした。その事件以降、カルトの統一教会(世界平和統一家庭連合)に注目が集まりました。

統一教会について、

- ①山上容疑者の犯行動機になったカルト信者家庭の実態
- ②政治とのあまりにも深い関係
- ③安倍家三代の強い因縁
- ④非常に多額の霊感商法被害や献金被害の実態
- ⑤祝福2世問題

などが露わになってきました。

本書では、単に統一教会だけを問題にするのではなく、わが国を蝕んできたカルト・オカルト・ニセ科学について、全体的に扱おうと考えました。

なぜなら、カルト・オカルト・ニセ科学はつながっていると思うからです。

そして、財産をすべて差し出させるような宗教も、がん患者などに「絶対に治る！」と断言してインチキ治療でお金を巻き上げる医師やクリニック、科学的根拠はないのに「健康に良い」と信じ込ませて儲ける健康系商品販売業者など、みな根底にはお金儲けがあるということが共通しています。しかし、そう見抜かれられないようなカモフラージュがされています。

本書では、ニセ科学・オカルト・超常現象・陰謀論・カルト(総称して“トンデモ”)のうち、特にカルト・オカルト・ニセ科学を扱っています。

トンデモを信じてしまう心理、科学とオカルトとの関係、たくさんあるニセ科学の中で今も蠢いているものの実態を知ることが大切です。

そのように考えて本書を企画したのです。

『RikaTan(理科の探検)』誌の「トンデモ」類特集をもとに

私は、大人の科学好きのための雑誌『RikaTan(理科の探検)』誌の編集長をしていました。

RikaTan誌は、「観る・知る・遊ぶサイエンス！」をキャッチフレーズに、観察・実験・ものづくり、自由研究、鉱物・星空・力・静電気・光と色・きれいな化学・食べ物などの科学の基本的な知識、地震・火山・台風などの自然災害とその基本的な知識とともに、ニセ科学・オカルト・超常現象・陰謀論・カルトなどを特集してきました。

それらの特集の内容は、私がほとんどを考えてきました。

本書は、特に、2018年10月号「カルト・オカルト～あなたに忍びよるトンデモ!!～」をもとにしてアップデートした論説が多いです。

その特集について、私は、次のように書いていました。

「Yahoo!知恵袋に『オカルトとカルトの違いって、何ですか？ カルトに丁寧語の“お”を付けたのがオカルトだと本気で思っていました。そしたら、教授に笑われました』がありました。もしかしたら、同様に思っていた人もいるかもしれませんね。

オカルトは、『秘密、隠されたもの』という意味のラテン語のoccultに由来する語で、『神秘的なこと。超自然的なさま』(広辞苑)を意味します。

カルトは、『狂信的な崇拜』(広辞苑)を意味し、過激で異端的な新興宗教集団を指すことが多かったのですが、現代では広く個人や社会に対して破壊的な行為をする集団を指す用語になっています。

まずは『隠されたもの』であるオカルトを明るい場所に引っ張り出してちょっと科学の目で見てみようと考えました。

さらに1995年(平成7)3月に『地下鉄サリン事件』といわれる大量無差別殺人事件を起こしたカルト集団のオウム真理教(2000年アレフ、2003年アーレフ、2008年Alephに改称)などを思い出すことにしました。そのようなカルトを生み出している社会状況は今も変わらないままだと思いますので」

大きく第1部と第2部に分けた

本書は次のように大きく2つに分けました。

第1部 カルト・オカルト事件の今とこれまで

第1章 政界に入りこむカルト集団(藤倉善郎)

第2章 反省なきカルト教団—統一教会(統一協会) 霊感商法事件 (鈴木エイト)

第3章 幸福の科学のオカルト教育の実態

—幸福の科学学園と偽大学「HSU」(藤倉善郎)

第4章 オウム真理教事件—オカルト、ニセ科学、ホンモノ科学、 そして陰謀論の交錯(藤倉善郎)

第5章 ライフスペース事件—ミイラ化遺体が生きている？(藤倉善郎)

第6章 パナウェーブ研究所白装束騒動

—面白おかしいテレビ報道後に死者を出したカルト集(藤倉善郎)

第7章 願望が歪めた現実—「奇跡の詩人」騒動(鈴木エイト)

第8章 法の華三法行詐欺事件

—一説には被害総額1000億円とも(藤倉善郎)

第9章 参政党とオカルト・疑似科学(雨宮純)

第10章 科学と宗教・オカルトとカルト

—正しい判断と寄り添いのために(榎本輝樹)

第11章 信じることの光と影

—個人史から振り返るカルト・開運商法問題(福頼宏隆)

第2部 トンデモを信じる心とトンデモ例

第1章 “トンデモ”を信じてしまう心のしくみ

—メタ認知的クリティカル・シンキングのすすめ(菊池聡)

第2章 「江戸しぐさ」問題にみる科学精神の欠如(原田実)

第3章 「伝統的子育て」で発達障害が治る？—親学のウソ(原田実)

第4章 オカルト・ニセ科学を教育界に持ち込んだTOSS・向山洋一氏
(左巻健男)

第5章 有機農業が内包するオカルト性
—商業と政治を巻き込むカウンターカルチャー(齋藤訓之)

第6章 オカルト的な医療(桑満おさむ)

第7章 オー(O)リングテストに医学的根拠なし(榎本輝樹)

第8章 「EM菌」は科学か宗教か
—万能を主張する「EM菌」の宗教的な側面とその変化
(呼吸発電)

第9章 ニセ科学に狙われるマンション大規模修繕(謎水)

実は、第2部で扱いたかったオカルト・ニセ科学は多々あるのですが、たとえば、私の『暮らしのなかのニセ科学』『学校に入り込むニセ科学』(共に平凡社新書)、『陰謀論とニセ科学 あなたもだまされている』(ワニブックスPLUS新書)で扱っていることから、「これは誰にも知ってほしい」というものに絞りました。

「カルト」とは何か

私は、カルトの定義論争に与するものではありませんが、広い意味と狭い意味があることは知っていてよいのではないのでしょうか。

カルトという言葉は、ラテン語の「colere(耕す)」から来ています。同じ「耕す」から由来の言葉に「culture(文化)」があります。耕したりしていない自然のままに対して、人手を加えた土地の上で学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによる営みです。

同じ語源から来た「cultus」がカルトです。これは宗教上の人間の営みで、宗教的な儀式・祭儀、ないし神々への崇拜を指していました。カルトのもともとの意味です。

1970年代頃から、意味が転じて次第に悪い意味のほうに傾いていきました。アメリカはベトナム戦争に挫折して、大人社会に反抗する「ヒッピー」と呼ばれる若者のグループがたくさん発生したのが70年代でした。

宗教では、新しく社会になじまない、奇異な感じを与える小さな宗教集団が多々生まれ、カルトと呼ばれるようになりました。カルトに新しい意味が付与されたのです。

さらにカルトは狭い意味で「破壊的な集団」をも指すようになります。

そこには、世に衝撃を与えた一部のカルトの反社会的事件の続発がありました。信教の自由を守りつつ、一部のカルトの反社会的行動へどう対処したらいいのかが問題になっていたのです。

たとえば、1969年、チャールズ・マンソン率いる「マンソン・ファミリー」という集団が、女優のシャロン・テイトを虐殺する事件が起きました。マンソンは自分をキリストに見立て、秘密の儀式を行っていたのです。

その10年後の1978年、南アメリカのガイアナの密林で、殺人と信徒900人以上が集団死するという、ジム・ジョーンズの人民寺院事件が起きました。

カルトが狭い意味で「破壊的な集団」を指すことは、わが国では1995年にオウム真理教(2000年アレフ、2003年アーレフ、2008年Aleph[アレフ]に改称)の信徒が「地下鉄サリン事件」といわれる大量無差別殺人事件などをきっかけに定着しつつあります。

破壊的カルトの集団としての特徴

宗教学者で、1960年代から統一教会からの救出などの活動をし、日本脱カルト協会顧問(元代表理事)の浅見定雄さんが、1995年11月に大阪宗教者平和協議会第5回定期総会で記念講演された内容に加筆訂正したもの(「戦後50年の宗教的状況 新々宗教とカルト」『オウムと・超常信仰と科学』日本科学者会議編、清風堂書店、1997)から要約的に紹介します。

破壊的カルトは反社会的なことをするわけですから、教団として、集団として、どうしてもそれに見合った特徴を持っています。

①閉鎖集団。

オウム真理教の上一色村、統一教会のホームのようなところに信者を囲い込む。情報と行動のコントロール。マインド・コントロール。

②「修業」と称するもので行動を強制。

その集団だけの特別の妄想が信者に植え込まれ、さらに妄想肥大化。教会の場合、非常識な集団結婚を信じるような妄想を持つようになる。

③教祖は独裁者。

独裁的で階級的で縦構造の集団。みんな自分が教祖に気に入られたいと、横の関係はライバル関係。

④ハーレム構造(浅見さん命名)。

教祖は性欲、金欲、物欲、権力欲が非常に強い。金欲が強いと信者を無一物にさせる。

⑤業績主義。

エリート、金持ち、働き者好み。結果として人間差別。社会福祉のようなお金がかかる事業はしない。女性差別が必ず見られる。

⑥信者に悪いことをさせる。

悪いことを正しいことのように思わせてやらせるので、洗脳やマインドコントロール。

破壊的カルトの教祖の特徴

同じく浅見さんからの紹介です。まず教祖の特徴です。

①以前にいかがわしいカルトの影響を受けている。

統一教会の文鮮明は、韓国の複数のセックス教で「修業」した過去。

②はったり、でまかせ、思いつきをやる。

オウム真理教の地下鉄サリン事件も3日前に決行を思いついた。やってみると案外信者に神通力。ますますはったりをエスカレート。

③たいてい誇大妄想的。

④社会への恨みや敵意。

境遇や経験のマイナスをプラスに転じることができずにそのまま大人に。文鮮明は、日本に対して大変な恨みを持っていた。

⑤犯罪常習者の特徴を持つ。

非常に自分勝手。良心と感情が鈍感。非常に刹那的。

浅見さんは、オウム真理教と統一教会の違いについて、両方のカルトがこの世間をどう見ているかに関係しているとしています。

統一教会にとっては、この世はある意味で「顧客(お客さん)」です。人々の財産を巻き上げる点ではオウム真理教以上とさえ言えますが、オウムのように簡単に人を殺したりしません。いつまでも金を巻き上がる「顧客」ですから、滅ぼしてしまっただけではいけないのです。

オウム真理教は、この世は統一教会のように収奪(金などをすべて剥ぎ取る)の対象ですが、もっと根本的に滅ぼしてもよい対象なのです。

オウム真理教の幹部は、「お坊ちゃん」「お嬢さん」育ちで教祖のような社会を恨む理由を持っていません。社会に悪いことをしてもまるでバーチャルなゲームをやっているような非現実感覚で、実感が伴っていないのでしょう。

そして、浅見さんは、「いちばん怖いのは“慣れ”だと思います」と述べます。

「アウシュビッツでユダヤ人たちを『処理』したドイツの将校や役人たちも、第七三一部隊で中国人やロシア人を生体解剖した日本の軍医たちも、初めは吐いたりした。それが何か月も何十回も同じことを繰り返していくうちに、平然と、何でもなく、日常のこととして、あの残虐さを続けることができるようになっていったのです。

『慣れ』ということこそ、人間を残忍にする最大の原因ではないかと私は思います。オウムの幹部たちにも同じようなことが起こったのではないのでしょうか」

本書のもとになったRikaTan誌

バックナンバーは、RikaTan読者サイト(<http://rikatan.com/>)で見ることができます。発行所の(株)SAMA企画(メール:samakikaku@rika.org)や書店でバックナンバーを注文することができます。

現在、RikaTan誌は、特集「ニセ科学を斬る！ Forever」(2022年1月号 通巻40号)をもって、休刊にしました。現在は、RikaTan誌の仲間たち(RikaTan委員)と本づくりや理科たんカフェのようなイベントをしています。

(左巻健男)